王勃の金陵関係詩文

～唐代金陵詩史の幕開け

寺尾　剛

一、序～唐代金陵詩史における王勃の位置づけ

唐代金陵（江蘇省南京市）詩文の歴史を通観してみた場合、その幕開けを告げるにふさわしい詩人は、「初唐四傑」の一人・王勃（六五〇～六七六）であろう。王勃には「白下駅餞唐少府」、「秋日登冶城北楼望白下序」、「江寧呉少府宅餞宴序」という金陵を舞台とする三篇の詩と序が現存している。ところが、これら王勃の金陵関係詩文は、これまであまり採り上げられ論じられて来なかったように思われる。たとえば地域別詩文傑作選としても読むことのできる南宋の方志『輿地紀勝』でも全く採り上げられていないのである。しかし唐代の金陵関係詩文の中で、実際に現地において金陵を取材した作品としては、上記の三篇が最も早い時期に属するものと認定できること（しかも製作年代がほぼ確定できる）[1]、また、その中身についても、歴史的に見て以後の金陵詩文の手本となるにふさわしい、質・量ともに充実した内容を有しているということ、これら二つの点から考えても、唐代金陵詩文史を考察する上で、看過できない重要な作品群と見なし得るのである。そこで本稿では、これら三篇の作品に訓読及び通釈を付しつつ、王勃の金陵に対する見方や描写法を考察してみることにしたい（『王子安集注』（上海古籍出版社、一九九五年）を底本とする）。また同時に、その後世への影響関係についても、主に李白[2]など唐詩人のそれと比較しつつ論じていくこととしたい。

二、「白下駅餞唐少府」詩について

【本文】

白下駅餞唐少府

白下駅にて唐少府を餞す（『王子安集』巻三）

下駅窮交日　下駅　窮交の日
昌亭旅食年　昌亭　旅食の年
相知何用早　相ひ知ること何ぞ早きを用ゐん
懐抱即依然　懐抱は即ち依然たり
浦楼低晩照　浦楼　晩照を低れ
郷路隔風煙　郷路　風煙を隔つ
去去如何道　去り去るは如何なる道ぞ
長安在日辺　長安は日辺に在り

【通釈】白下駅にて唐少府に餞別する

白下の駅亭での貧しき交わりの日々、それはあたかも若き日の韓信（『史記』「淮陰侯列伝」）が下郷昌亭の亭長のもとで寄食していた年月のよう。

二人が相知る仲になれたのが遅すぎたなどと残念がる必要はない。胸に抱く友情はずっと変わらず続いていくであろうから。

別れの宴席を開いている浦辺の楼閣には、暮れ方の夕陽が低く照り輝いている。あなたの故郷への旅路は、風や靄によって阻まれていて、さぞや苦労も多かろう。

あなたの去ってゆく道はいかなる道であろうか。目指す長安は太陽のあるあたり。遠いには違いないが、そこは天子様のいらっしゃるところでもある。

この五言律詩は、金陵を舞台とした王勃の作品のうち、唯一の詩である。まず注目されるのは詩題にある「白下駅」という地名。「白下」とは『晋書』『宋書』『南斉書』『梁書』『陳書』等にしばしば見える地名で、戦乱時には、軍隊が駐屯したとか、争奪の場となったという記述が多いことから、六朝時代、金陵における軍事的要衝の一つであったことがわかる。ことに『南斉書』の記述によれば、「倖臣伝・劉係宗」に「上（斉の武帝）欲脩治白下城、難於動役。係宗啓役東民丁随寓之為逆者、上従之。後車駕講武、上履行白下城、曰、『劉係宗為国家得此一城。』」とあり、また「武十七王伝・南海王子罕」に「（斉の武帝）永明六年、…上初以白下地帯江山、徙琅邪郡自金城治之。子罕（南海王）始鎮此城。」とあって、永明年間に斉の武帝がここに築城し、さらに僑郡としての（南）琅邪郡の治所としたことが記されている。唐代に入り、金陵の地名は、江寧県、帰化県、金陵県と目まぐるしく変更され、さらに『旧唐書』によれば、「（高祖武徳）九年、揚州移治江都、改金陵為白下県。以延陵・句容・白下三県属潤州、丹陽・溧陽・溧水三県属宣州。移白下治故白下城。（太宗）貞観七年、復移今所。九年、改為江寧県。」とあり、唐の武徳九（六二六）年から貞観九（六三五）年にかけて、金陵を白下県と称していたことがわかる。

その白下県の治所所在地が、本詩に見える「白下駅」であり、王勃の時代、なお駅亭として存続していたということになる。ちなみに後に李白もここを訪れ、「金陵白下亭留別」詩に「駅亭三楊樹、正

当白下門」、「献従叔当塗宰陽冰」詩に「小子別金陵、来時白下亭」、「留別金陵諸公」詩に「五月金陵西、祖余白下亭」、詩題に「金陵白下亭留別」とあるなど、頻繁に詩に詠じている。また中晩唐期にも李建勛「遊棲霞寺」詩に「養花天気近平分、瘦馬来敲白下門。」、韓偓「倒押前韻」詩に「白下同帰路、烏衣枉作隣。」とあるように、用例は少ないものの「白下」「白下亭」「白下門」という地名が「詩跡」化していたことがわかる。しかしその所在地については現在においても曖昧で、少なくとも次の四説がある。

①南唐都城・宋代府城の東門（現在の大中橋）付近
②現在の幕府山付近
③現在の象山付近
④現在の獅子山付近

①の説の根拠は、金陵に長期にわたって在住した北宋の王安石の「東門」詩に「東門白下亭」とあること、先にも挙げた『旧唐書』に「移白下治故白下城。貞観七年、復移今所。」とあること。すなわち『旧唐書』編纂時（後晋開運二〔九四五〕年）を「今」とすれば、この時金陵は南唐の首都であり、先主李昪が新しい都城（江寧府城）を建設していた。その都城の東門（現在の南京市東南の大中橋付近）が、遅くとも宋代には別名「白下門」と称せられていたことは、王安石の用例や、南宋・張敦頤『六朝事迹編類』「白下門」条の「東門謂之白下。」とある点から明らかである。李白関係の諸注の多くがこの「東門」説を採るのであるが、しかし白下県治が当初の場所から移転したことがあるという記述は『旧唐書』以外に見られないことが難点の一つとして挙げられる。また、かりに東門付近に移転したことがあったにしても、王勃・李白の指すそれは移転前のものと考えられる。つまり、次に挙げる王勃の「秋日登冶城北楼望白下序」にも、タイトルに「冶城」（唐代江寧県治・現在の朝天宮）の「北楼」から「白下」を眺めているとあるのであるから、場所としては「冶城」のほぼ真東に位置する「東門」付近とするのはあまり適切でないように思われる。また、李白も「留別金陵諸公」詩に「五月金陵西、祖余白下亭」と語っており、これでは方向が全く反対と言うことになってしまう。

以上のことから、少なくとも王勃・李白の「白下」は①とは別の場所と考える方が穏当である。②から④の説はいずれも唐の白下県治を東晋の白石壘、斉の武帝の琅邪郡城（白下城）の旧址と捉え、南宋『景定建康志』、元『至正金陵新志』などの記述から「白下村」付近と比定し、その所在地を今日の考古学的成果も踏まえて考証している。②説は蔣賛初『南京史話』（中華書局、一九六三年）などであるが、これは現在の幕府山（六朝期の幕府山はそのやや南の現在の郭家山）、すなわち今の南京市最北端の長江に面する連峰付近とする（「冶城」のほぼ真北）説であるが、最近ではあまり採られていない。むしろ最有力なのは③説。呂武進・李紹成・徐柏春『南京地

名源』（江蘇科学技術出版社、一九九一年）、盧海鳴『六朝都城』（南京出版社、二〇〇二年）、国家文物局編『中国文物地図集・江蘇分冊』（中国地図出版社、二〇〇八年）などがこの説である（郁賢皓主編『李白大辞典』も「金川門外」とし、ほぼこの説に従う）。象山は現・幕府山の西南、郭家山の西隣、明代の金川門のほぼ北東にある小さな山である。六朝の建康城から見れば北西、「冶城」（唐代江寧県治）から見ても北北西に位置し、王勃・李白の詩文ともあまり齟齬をきたさない。④説は、近年出版された楊国慶・王志高『南京城墻志』（鳳凰出版社、二〇〇八年）に指摘されている説。本書は③説も認めつつ、「更有可能在今獅子山南麓至鍾阜門与興中門之間。」（p.100）と指摘する。つまり象山のさらに西南、明代南京城壁の西北角にある獅子山（かつての盧龍山。李白「三山望金陵寄殷淑」に「盧龍霜気冷、鵠鵲月光寒」とある。海抜一三〇メートル。近代史では南京条約締結地として知られる）の南麓とも考えられるというわけである。李白の言う「金陵の西」にいよいよ合致することになる。

②～④説、いずれを採るにせよ、これら近年の研究成果は王勃・李白の作品の読みを大きく変えることになる。つまり両者とも、高台に臨み、しかもすぐ眼下に長江がゆるやかに北から東へと流れを変えているという雄大な光景を前にしつつ作品を書いていたことになるのである。そう考えれば、王勃の詩中にある「浦楼低晩照、郷路隔風煙」の二句は、一層、壮観さを増すことにもなろう。

王勃のこの詩における今一つの注目点は、尾聯「去去如何道、長安在日辺」にある。この二句は南朝宋・劉義慶『世説新語』「夙恵篇」（及び『晋書』「明帝紀」[3]）にある「晋明帝数歳、坐元帝膝上。有人従長安来。元帝問洛下消息、潸然流涕。明帝問何以致泣、具以東度意告之。因問明帝曰、『汝意謂長安何如日遠。』」答曰、『日遠。不聞人従日辺来、居然可知也。』元帝異之。明日、集群臣宴会、告以此意。更重問之。乃答曰、『日近。』元帝失色、曰、『爾何故異昨日之言邪。』答曰、『挙目見日、不見長安。』」を踏まえる。このエピソードは、単に明帝の聡明さを賞揚することだけを意図しているわけではない。その背後に晋王朝の東渡南遷の悲哀がベースとして存在していることを見逃してはならないであろう。つまりここでは晋王朝の故地「長安」「洛下（洛陽）」と仮寓地「建康（金陵）」とが鮮明に対比されていることにこそ重要な意味がある。従って、明帝の最初の返答は、確かにウイットに富み、その聡明さを物語るに十分であるが、むしろ重要なのは明帝の二度目の返答である。明帝の「不見長安」という一語こそ、東晋王朝の悲哀を代弁するものであり、元帝ばかりでなく居並ぶ群臣達の涙を誘うものであった。このエピソードはその意味で、明帝が聡明な頭脳を持っていたと言うだけでなく、さらには人としての思いやりや温かさを持った名君であったことをも強調しているわけである。だからこそ『晋書』ではこの発言の後に、「由是（元帝）益奇之。」という評語を加えているのである。

まさにこれを王勃は「長安」に帰り行く友人を見送る悲哀の情として応用したわけである。場所が東晋の故地・金陵であればこそ生

きる、極めて適切な用典である。しかも王勃は「長安」が「日辺」と同じ距離にあり、遠いところであるとしつつも、今や、いつかはたどり着けるであろう統一王朝の帝都であるということも言外に含意させているであろう（従ってあえて「不見」と言わない）。だとすればこの詩句には友人に対する激励の意味も込められていると考えてよい。(4)

ここで、この典故を用いた作品として、今一つ挙げておきたいのが、唐代金陵懐古詩の傑作とされる李白の「登金陵鳳凰台」である。「鳳凰台上鳳凰遊、鳳去台空江自流。呉宮花草埋幽径、晋代衣冠成古丘。三山半落青天外、一水中分白鷺洲。総為浮雲能蔽日、長安不見使人愁。」とあり、やはり王勃同様、この故事を末尾に用いているのである。王勃に比較して、李白の場合、よりストレートに元帝・明帝の望郷の悲哀を自らの悲哀に重ね合わせている。両作品を比較してみるのも興味深いのであるが、いずれにせよ、この故事をより早期に用いたのは王勃であり、あるいは李白もこれを王勃に学んだと考えるのも不可能でない。その意味でも、王勃のこの「白下駅餞唐少府」詩は唐代金陵詩史の開幕を告げる作品として挙げるにふさわしいものである。

三、「秋日登冶城北楼望白下序」について

【本文】

秋日登冶城北楼望白下序　（『王子安集佚文』）

僕不才、懐古人之士也。
峴山南望、恨元凱之塗窮、
禹穴東尋、悲子長之興狭。
徘徊野沢、散誕陂湖。
思仮俊翮而游五都、願乗長風而眺万里。
佳辰可遇、属楼雉之中天、
良願果諧、偶琴樽之暇日。
携勝友、陟崇隅。
白雲展面、青山在目。
南馳漲海、北控淮潮。
楚山紛列、呉江晧曠。
川原何有、紫蓋黄旗之旧墟、
城闕何年、晋宋斉梁之故迹。
時非国是、物在人亡。
灌莽積而蒼烟平、風濤険而翠霞晩。
関山牢落、壮宇宙之時康、
井邑蕭条、覚衣冠之気尽。
秋深望徹、景極情盤。
俯万古於三休、窮九垓於一息。
思欲校良游於日下、賈逸気於雲端、
引江山使就目、駆烟霞以縦賞。

生涯詎幾、此念何期。
灑絶翰而臨清風、留芳樽而待明月。
俱題四韻、不亦可乎、
人賦一言、其詞云爾。

【訓読】

秋日に冶城北楼に登り白下を望むの序

僕は不才なれど、古人を懐ふの士なり。
峴山南に望みては、元凱の塗窮するを恨み、
禹穴東に尋ねては、子長の興狭まるを悲しみたり。
野沢を徘徊し、陂湖を散誕す。
俊翮を仮りて五都に游ばんと思ひ、
長風に乗りて万里を眺めんと願ふ。
佳辰は遇ふべく、属たま楼雉の中天にあり、
良願は果して諧ひ、偶たま琴樽の暇日にあり。
勝友を携へ、崇隅に陟る。
白雲は面に展じ、青山は目に在り。
南は漲海に馳せ、北は淮潮を控ふ。
楚山は紛として列し、呉江は晧曠たり。
川原に何か有る、紫蓋・黄旗の旧墟あり、
城闕は何れの年ぞ、晋・宋・斉・梁の故迹あり。
時は非なるも国は是にして、物は在れども人は亡ぶ。
灌莽は積りて蒼烟平らかに、
風濤は険しくして翠霞晩る。
関山は牢落として、宇宙の時の康なるを壮とし、
井邑は蕭条として、衣冠の気の尽くるを覚ゆ。
秋は深くして望は徹し、景は極まりて情は盤まる。
万古を三休に俯し、九垓を一息に窮む。
思欲す　良游を日下に校べ、逸気を雲端に賈ひ、
江山を引きて目に就かしめ、
烟霞を駆りて以て賞を縦にせんことを。
生涯は詎幾ぞ、此の念ひ何ぞ期せん。
絶翰を灑ぎて清風に臨み、芳樽を留めて明月を待たん。
俱に四韻を題するは、亦た可ならずや、
人一言を賦す、其の詞に爾云ふ。

【通釈】「秋の日に冶城の北楼に登り白下を望む」の序

私は不才ではあるけれど、古人を懐うことを心得ている士であると思っている。そこで古を偲ぶため各地を旅して、元凱（杜預）が自らの顕彰碑を建てたという襄陽（湖北省）の峴山を南に眺めては、彼の『春秋左氏伝集解』で述べた歴史学の道が今や窮まってしまっているのを恨み、また東のかた子長（司馬遷）が旅した会稽（浙江省）の禹穴（禹の陵墓）を尋ねては、『史記』に託した司馬遷の思いが現代では興味を持たれなくなってしまっているのを悲しんだりし

たものである。野や沢をさまよったり、丘陵や湖を気ままに巡ったりもした。さらには、すばらしい羽を借りてきて、あの宋玉が巡ったという「五都」（「好色賦」）を遊覧したいと思ったり、少年時代の宗元幹が願ったように、自分もまた、遠く吹く風に乗って万里彼方まで眺めてみたいとも願っている。

本日はまさに遊覧にふさわしい吉日、我々はちょうど天の中程にあるかのような城楼の牆壁に登っており、宿願は果たされて、琴や酒樽も調ったのどかな日に巡り会えている。すばらしい友人と連れだって、高い山の一隅に登っていけば、白雲は面前に展開し、青山は眼中に入ってくる。南は遠く漲海（南の果ての海）まで目を馳せることができるかのようであり、北は遥か淮河（金陵の秦淮河ではない）の潮流を控えているのが見えるかのようである。楚の山並みは幾重にも列を成し、呉の河川は白く輝きつつ広々と流れている。

この金陵の川原に何があるかと言えば、かつて紫蓋・黄旗といった王者の気を立ち昇らせた都の旧跡があり、また都城の城闕はどれほどの年月を経ているのかと言えば、今もなお東晋・宋・斉・梁時代の遺跡が残っている。時代はもはや過ぎ去ってしまったが、国都であった事実は今もここに存している。一方、文物は残ったとはいえ、かつての人々は皆滅んでしまっている。荒れ果ててしまった原野には草木が積もり重なり、青い靄が平らかにたなびいている。川面には風に立つ波が険しく揚がり、翠色の霞の中、日は暮れてゆく。関所の山々は閑散としており、宇宙の時が今、わが唐王朝の功績によって安らかになったことを壮大な事業と認めうるものの、一方、この江寧の村里は蕭条たるもので、かつて華やかな衣冠に身を飾った貴人達の気がもはや尽きてしまったのかと感じてしまう。

秋は深く、眺望は遠くまできく。景物を極め尽くせば、情は鬱々としてくる。楚の王が建てた三休台のごとく高いこの冶城の楼閣から万古の歴史を俯瞰すれば、この広大な大地を一息に窮めたような思いがする。この良き遊覧を太陽の下に吟味し、卓越した気を雲の果てにて買い取り、河川や山々をわが目の中に引き寄せ、靄や霞を駆り立てて、景色を愛でる心をほしいままにしたいと願っている。しかし、人生はいくばくのものか。この今の私の願いもいつになったらかなうことか。

そこで列席の皆様にお願いしたい。まずはすぐれた筆をきれいに洗い、清らかな風に臨み、芳しい酒樽を準備して、明月の昇るまでお待ち下さるように。ともに四韻の詩を題するのも、なかなかよいものである。一人ごとに一言ずついただいた。その詞は以下の通り。

この作品は、いわゆる羅振玉校録日本慶雲四年写本『王子安集』佚文二十三篇の一つ。冶城の北楼から白下一帯を眺望しての感慨を述べた作である。王勃が訪れた当時、金陵は江寧県と称されていて、その冶所は冶城（現在の朝天宮付近）にあった。従って、この北楼も、おそらく江寧県城のそれと考えられるが、王勃があえてそう言わず、「冶城」と言ったのも、その地名の持つ歴史的な重みを意

識したからに他ならない。「冶城」が江寧県の治所として誕生するのは、北宋『太平寰宇記』「江南東道・江寧県」等によれば、南朝陳の滅亡後間もなく、隋の文帝・開皇十（五九一）年のことで、以後、唐代に入っても金陵の治所は、前節に述べたように一時的に白下に移されたことがあるものの、基本的にはこの地にあった。諸伝によれば、この「冶城」こそ、歴史上に現れた金陵の地名の中で最も古い。早くも春秋時代、東周敬王二五（前四九五）年、呉王夫差がここに冶金所、すなわち武器鋳造のための工場を作ったと伝えられる。その後、東晋初期まで冶金所として使用されたが、やがて東晋建国の功臣・王導が冶金所を石頭城東南に移し、この地を広大な庭園とし、「西園」と称した。後、東晋太元一五（三九〇）年、孝武帝によって西園内に「冶城寺」も作られて、繁栄は陳朝滅亡まで続いた（以上『南京地名源』『六朝都城』等を参照）。まさしく懐古の場にふさわしい土地と言えるであろう。なお、冶城の近くには李白「登金陵冶城西北謝安墩」詩の自注に「此墩即晋太傅謝安与右軍王羲之同登、超然有高世之志。」とあるように、謝安と王羲之が登ったと言われる謝安墩なる遺跡が存在したようである。李徳裕「重題」詩にも「想公高世志、祇似冶城遊。」と、この故事を踏まえた表現がある。その他、冶城の用例として、劉禹錫の「金陵懐古」詩に「潮満冶城渚、日斜征虜亭。」とある。

この作品は、まず冒頭に自身が懐古の旅を好む性格であることを宣言するところから始め、金陵懐古を語るためのプロローグとしている。ついで、「携勝友、陟崇隅。白雲展面、青山在目。南馳漲海、北控淮潮。楚山紛列、呉江晧曠。」と、金陵の地の雄大な形勝を、やや誇張的に語る。なおこの作品は、同じく破壊され荒廃した都市を描いた名作、鮑照「蕪城賦」の影響（ただしこちらは揚州）が随所に見られるが、「南馳漲海、北控淮潮」という表現も、あるいは「蕪城賦」の「南馳蒼梧漲海、北走紫塞雁門。」を意識したものと言えるかも知れない。

ついで王勃は現在の金陵の荒廃を描く。この部分は以後の金陵文学史、とりわけ唐代金陵懐古詩の歴史的発展を見る上で、その先蹤を成すものとして貴重である。「川原何有、紫蓋黄旗之旧墟。」とは、かつて金陵が王者の気に満ちた栄光の地であったことを表している。「紫蓋・黄旗」とは、『宋書』「符瑞上」に見える「漢世術士言、『黄旗・紫蓋（天子の御旗と車蓋。いずれも天子の出現を象徴する気）、見於斗・牛（天文における呉の分野）之間、江東有天子之気。』」という記述を踏まえるもので、王権を象徴する気が金陵に充満していることを表す際にしばしば用いられる。たとえば侯景の乱によって破壊された金陵を嘆いた著名な庾信の「哀江南賦」にも「昔之虎踞龍蟠、加以黄旗紫気、莫不随狐兔而窟穴、与風塵而殄悴。」という類似表現が見え、また李白「留別金陵諸公」詩にも「黄旗一掃蕩、割壌開呉京。」と見える。ちなみに王勃が金陵の王気を常に意識していたであろうことは次に挙げる「江寧呉少府宅餞宴序」にも「霸気尽而江山空。」とあり、また「三国論」に「先時秦帝東遊、亦云金陵

当有王者興。」とあることから明らかである。「城闕何年、晋宋斉梁之故迹。」は東晋以降の建康都城の廃墟を言うが、これなどは以後の金陵懐古詩には定番の発想となる。「時非国是、物在人亡。」も自然の不変性と人事の可変性との対比。これも以後の懐古詩全般における常套的発想となる。「灌莽積而蒼烟平、風濤険而翠霞晩。」も蕭条たる風景を描いて秀逸。特に上句は鮑照「蕪城賦」の「灌莽杳而無際、叢薄紛其相依。」を参考にしていること明らかである。「関山牢落、壮宇宙之時康、井邑蕭条、覚衣冠之気尽。」は唐王朝の統一の偉業を讃えつつも、後半に現在の金陵の寂涼たる様を描いて、遺憾の意を込めている。「井邑」という語には田舎の地方都市というニュアンスも含まれていよう。また「衣冠」は華やかな六朝貴族たちを意味するであろう。後に李白「登金陵鳳凰台」詩に「晋代衣冠成古丘」という形で活かされることになる。「秋深望徹、景極情盤。俯万古於三休、窮九垓於一息。」はこの作品の懐古部分の総括に当たる一段。登高眺望しつつ万古の昔に想いを馳せて感慨にふけるという中国古典文学における伝統的パターン。鮑照「蕪城賦」で言うならば「直視千里外、唯見起黄埃。凝思寂聴、心傷已摧。」の部分に相当しよう。

この作品、次に挙げる「江寧呉少府宅餞宴序」ほどの完成度はないものの、唐代に入ってからなお、金陵に限らず懐古文学自体乏しかった初唐期にあっては、特筆に価する貴重な作品と言いうるであろう。

四、「江寧呉少府宅餞宴序」について

【本文】

江寧呉少府宅餞宴序（『王子安集』巻八）

蔣山南望、長江北流。
伍胥用而三呉盛、孫権困而九州裂。
遺墟旧壌、百万里之皇城、
虎踞龍蟠、三百年之帝国。
闕連石塞、地実金陵。
霸気尽而江山空、皇風清而市朝改。
昔時地険、曽為建業之雄都、
今日太平、即是江寧之小邑。
呉生俊栄、甫佐烹鮮、
我輩良游、方馳去鶴。
梁伯鸞之遠逝、自有長謡、
閔仲叔之遐征、仍逢厚礼。
臨別浦、枕離亭、
陣雲四面、洪濤千里。
簾帷後闢、竹樹映而秋煙生、
棟宇前臨、波潮驚而朔風動。
嗣宗高嘯、緑軫方調、
文挙清談、芳罇自満。

想衣冠於旧国、便値三秋、
憶風景於新亭、俄傷万古。
情窮興洽、楽極悲来。
愴零雨於中軒、動流波於下席。
嗟乎、
九江為別、帝里隔於雲端、
五嶺方踰、交州在於天際。
方厳去舳、且対窮途。
玉露下而蒼山空、他郷悲而故人別。
請開文囿。共瀉詞源。
人賦一言、俱題四韻。

【訓読】

江寧の呉少府宅にて餞宴するの序

蔣山は南に望み、長江は北に流る。
伍胥は用ゐられて三呉盛んに、孫権は困じて九州裂く。
遺墟・旧壌は、百万里の皇城たり、
虎踞・龍蟠は、三百年の帝国たり。
闕は石塞に連なり、地は実に金陵たり。
霸気尽きて江山空しく、皇風清くして市朝改まる。
昔時　地は険しく、曽て建業の雄都為りしも、
今日　太平にして、即ち是れ江寧の小邑たり。
呉生は俊宋にして、甫佐亨鮮し、
我輩は良游し、方に去鷁を馳せんとす。
梁伯鸞の遠く逝けば、自ら長謡有り、
閔仲叔の遐かに征けば、仍って厚礼に逢ふ。
別れの浦に臨み、離れの亭に枕すれば、
陣雲は四面に、洪濤は千里なり。
簾帷は後に闢き、竹樹は映じて秋煙生じ、
棟宇は前に臨み、波潮は驚きて朔風動く。
嗣宗は高く嘯き、緑軫方に調ひ、
文挙は清く談じ、芳樽は自ら満つ。
衣冠を旧国に想へば、便ち三秋に値ひ、
風景を新亭に憶へば、俄に万古を傷む。
情窮まれば興は洽く、楽しみ極まれば悲しみ来たる。
零雨を中軒に愴み、流波を下席に動かす。
嗟乎、
九江　別れを為せば、帝里　雲端に隔てられ、
五嶺　方に踰えんとすれば、交州は天際に在り。
方に去舳を厳へ、且に窮途に対せんとす。
玉露下りて蒼山空しく、他郷に悲しみて故人に別る。
請ふ文囿を開きて、共に詞源を瀉がん。
人　一言を賦し、俱に四韻を題せん。

【通釈】「江寧の呉少府宅にて餞別の宴をする」の序

蔣山は南方に望まれ、長江は北に流れている。春秋時代、伍子胥が呉国に登用されて以来、この三呉地方（江蘇省南部から浙江省一帯）は盛んになり、三国・呉の孫権がこの地に苦しんでより、中国全土は分裂状態となった。今ある廃墟・旧跡は、かつて百万里の地を支配した皇城であったところ。諸葛亮が、虎がうずくまり龍がとぐろを巻いたような天険の山々に囲まれていると絶賛したこの地は、三百年にわたる帝国を築いてきた。その城闕は石の塞とも言うべき石頭城に連なっており、この地はまことに金の陵と称するにふさわしい。ところが、現在は金陵の霸気は尽きて江や山を空しく残すばかりで、唐王朝の清らかな皇風によって都市の様子はまったく変わってしまった。昔は地の険しさに拠った、建業という名の雄都であったが、今日は天下太平となり、江寧という名の小さな地方都市となってしまった。

ところで、宴を主催してくださった呉さんは優れたお役人であり、役所を輔佐してあたかも小魚を調理するかのように（『老子』の故事）みごとにこの地を治められている。一方、私はそのおかげで素晴らしい旅を体験させていただき、さらにこれから船を走らせて南方へと旅立とうとしてる。私はちょうど後漢の梁伯鸞（梁鴻）が、章帝が都に大宮殿を造営しようとして民を苦しめたことを批判して長謡「五噫歌」を歌い、遠く南方に赴いたという故事（『後漢書』）に我が身を重ね、また清貧の人・閔仲叔（閔貢）が自分の食事のために安邑の人々に迷惑を掛けてはならないとして、その地を遠く離れた故事（『東観漢記』）に我が身を重ねているが、そんな私を呉さんは厚い礼をもって迎えてくださった。

今、別れの浦辺に臨み、別れの亭に泊まっているが、外を見れば、群がる雲が四面に広がり、大きな波濤が千里にわたって沸き立っている。また、後のとばりを開けば、竹林が秋の靄の中に照り映えており、建物の棟の前に臨めば、波の潮は驚いたように逆巻き、北風が吹き付けている。私は嗣宗（竹林の七賢の一人・阮籍）のように高く嘯きつつ、琴を奏でようとして琴柱を調える。一方、あなたは文挙（建安七子の一人・孔融）のように清談を語りつつ、芳しい樽をいっぱいに満たしている。今やちょうど秋の候、この古き都で華やかな衣冠を纏っていた六朝貴人達のことに想いを馳せる。あるいはまた、この地にある新亭で、都洛陽を追われ南遷してきた貴人達が金陵と洛陽の風景の違いに涙した故事（『世説新語』）を思い出せば、にわかに万古の悲しみに襲われてしまう。情窮まれば興趣はあまねく広がるが、やがて楽しみ極まれば悲しみがやってくるもの。軒端に雨が滴り落ちるのを痛み悲しんでいると、宴会の席の下で波が滔々と流れているのが感じられる。

ああ、多くの川が集まり流れているこの地に別れを告げれば、帝都長安はいよいよ遠く、雲の果てに阻まれてゆく。私はこれから南方の五嶺を越えて、天の果て交州に行かねばならない。船旅の旅装を整え、道の窮まるところまで行くのである。玉のごとき露の降り

しきる人気無き青山を、異郷を悲しみつつ友人と別れて進んで行かなければならないのである。

そこで在席の方々とともに、文才を開陳して、すぐれた詩句を捻り出すことにしたい。つまり一人ごとに一言ずついただき、四韻の詩を題するのである。

この作品は唐代の金陵文学史上、早期における代表的傑作と言って過言ではない。金陵懐古の悲しみと友人との離別の悲しみが渾然一体となって読者の胸を打つ。文学の中での都市イメージの形成という意味においても、王勃がこの作品の中で次々と描き出していく金陵の都市としての性格や特色は、以後の金陵詩文においても繰り返し言及されていくものばかりである。これら、王勃の描く金陵の「肖像」を、本文に従って順に列挙していくと、次のようになる。

①金陵のランドマークたる鍾山（蔣山・北山・紫金山）に言及する。
②「天塹」と称せられた金陵一帯の雄大な長江に言及する。
③長期（約三百年）にわたって都城であったことに言及する。
④陳朝滅亡後、廃墟となった六朝遺跡について言及する。
⑤諸葛亮の言葉として伝わる晋・張勃『呉録』の「鍾山龍盤、石頭虎踞、此乃帝王之宅也。」の語を踏まえる。
⑥呉の孫権の築いた要塞・石頭城に言及する。
⑦いわゆる「金陵王気」に言及する。
⑧かつての雄都がいまや地方の鄙びた一小都市に堕してしまっていることを嘆く。
⑨かつての六朝貴人達のきらびやかで豪奢な生活を偲ぶ。
⑩北地を奪われた南朝人の望郷の思いを託した「新亭の嘆き」の故事を踏まえる。
⑪現在の帝都（長安、時によっては洛陽）と遠く隔たった地にあることを嘆く。

以上を本文に照らし合わせてていくと、まず①②に相当するのが「蔣山南望、長江北流。」である。「鍾山」（蔣山、北山など別名多数。現在の紫金山）の壮麗優美な山並みは、現在においても南京市のどこからでも眺められる最も親しみ深い存在である。金陵にとってこの山は、まさしくランドマーク的存在であること古今変わりがない。文学の世界でも、六朝時代以来、最も多くうたわれ続けた金陵を代表する「詩跡」の一つ。王勃がこの山を冒頭に挙げたのも、明らかに金陵のシンボルとして意識していたからであろう。李白詩にも「留別金陵諸公」に「鍾山危波瀾、傾側駭奔鯨。」、「登瓦官寺閣」に「鍾山対北戸、淮水入南栄。」といった用例がある。さらに、金陵の西から北にかけて取り囲むようにして流れる雄大な長江も金陵のシンボルであろう。歴史上、幾多の六朝君主がこの長江を「天険」「天塹」と称して国都防衛のかなめとして頼ってきたこと、周知

の通りである。李白詩にも「入朝曲」に「金陵控海浦、渌水帯呉京。」、「金陵酒肆留別」に「請君試問東流水、別意与之誰短長。」など金陵一帯の長江を巧みに詠み込んだ用例が多い。また王昌齢詩「留別岑参兄弟」に「江城建業楼、山尽滄海頭。」とあるように、金陵を「江城」と称している例もある。特に著名な例としては、劉禹錫「石頭城」詩の「潮打空城寂寞回。」が挙げられる。廃墟となった石頭城に打ち寄せる長江の潮を描いたものである。

③については本文の「孫権困而九州裂」「三百年之帝国」「曽為建業之雄都」などがこれに相当する。六朝の旧都であるということが、この都市の最大の特色である以上、当然言及されてしかるべきであろう。李白の「金陵歌送別范宣」詩にも「四十余帝三百秋、功名事跡随東流。」「金陵昔時何壮哉、席巻英豪天下来。」などとある。「三百年」という語にこだわれば、孫逖詩「丹陽行（ここでの丹陽は金陵を指す）」に「可憐宮観重江裏、金鏡相伝三百年。」とあり、李商隠詩「詠史」に「三百年間同暁夢、鍾山何処有龍盤。」とあり、温庭筠詩「雞鳴埭曲」に「盤踞勢窮三百年、朱方殺気成愁煙。」とあるなど、金陵懐古における定番の表現となっていることがわかる。

④に相当するのは本文の「遺墟旧壌」など。これも「過去の繁栄」と「現在の荒廃」との落差を誇張的に対比するのが懐古詩、懐古文学の基本であるから、詠まれて当然と言えよう。金陵の場合、国都であるがために、壮麗な宮殿群の破壊がとりわけ強調される。李白「登金陵鳳凰台」詩の「呉宮花草埋幽径」、「金陵白楊十字巷」詩の「天地有反復、宮城尽傾倒。」、許渾詩「金陵懐古」の「禾黍高低六代宮。」、杜牧詩「台城曲二首、其二」の「乾蘆一炬火、回首是平蕪。」、張喬詩「台城」の「宮殿余基長草花、景陽宮樹噪村鴉。」など枚挙に暇がない。

⑤に相当するのは本文の「虎踞龍蟠」である。諸葛亮が金陵の地を賛嘆して「鍾山龍盤（「蟠」とも書く）、石頭（「石城」に作るものもある）虎踞、此乃帝王之宅也。」と称したという故事は極めて有名であったらしく、唐以前にも庾信「哀江南賦」に「昔之虎踞龍蟠」という用例がある。唐代にあっても、この王勃の例を皮切りに、李白詩「金陵歌送別范宣」に「石頭巉巖如虎踞、凌波欲過滄江去。鍾山龍盤走勢来、秀色横分歴陽樹。」、「永王東巡歌十一首、其四」に「龍蟠虎踞帝王州、帝子金陵訪古丘。」、魏万詩「金陵酬李翰林謫仙子」に「同舟入秦淮、建業龍盤処。」、徐夤詩「呉」に「建業龍盤雖可貴、武昌魚味亦何偏。」、李群玉詩「秣陵懐古」に「龍虎勢衰佳気歇、鳳皇名在故台空。」などとある。

⑥に当たるのは「闕連石塞」である。石頭山は金陵の西部に長江沿いに連なる連山。⑤にも指摘したように、金陵の地勢を語る際に、東の鍾山と西の石頭山とがしばしば対比的に取り挙げられる。呉の孫権がこの地を都として建設する以前に、軍事的要塞としてまず建設したのが石頭城であり、国都建設のきっかけとなった象徴的な城塞（しかも六朝時代、実際にここが戦場となることが多かった）と言うことで、唐詩にもしばしばうたわれることになった。唐代詩

文における石頭城の用例は枚挙に暇がないが、その最高傑作と称せられるのが劉禹錫「石頭城」詩「山囲故国周遭在、潮打空城寂寞回。淮水東辺旧時月、夜深還過女牆来。」であることはよく知られている。

⑦に当たるのが「霸気尽而江山空」である。秦の始皇帝が金陵に王気が立ち昇っているという望気者の発言を恐れ、その気を鎮めようとしたという故事は、史書等随所に見られる。例えば、「始秦時望気者云、『五百年後金陵有天子気』、故始皇東遊以厭之、改其地曰秣陵（馬草の丘の意）、塹北山以絶其勢。」（『晋書』「元帝紀」）など。これは『史記』「高祖本紀」にある「秦始皇帝嘗曰『東南有天子気。』於是因東游以厭之。」という記述を金陵に当てはめて拡大解釈していった末に生まれた伝承であろうが、金陵を語る詩文には実にしばしば言及される。特に唐王朝下では、その金陵王気がすでに尽きたと語ることが多い。たとえば李白詩「登瓦官閣」に「山空霸気滅、地古寒陰生。」、劉禹錫詩「西塞山懐古」に「西晋楼船下益州、金陵王気黯然收。」、李商隠詩「南朝」に「地険悠悠天険長、金陵王気応瑤光。休誇此地分天下、只得徐妃半面妝。」、許渾詩「金陵懐古」に「玉樹歌残王気終、景陽兵合戍楼空。」などとあるごとくである。

⑧は④⑦⑪などとも重複するが、王勃の本文で言えば「霸気尽而江山空、皇風清而市朝改。昔時地険、曽為建業之雄都、今日太平、即是江寧之小邑。」の部分。唐王朝の大統一、そしてそれに伴う金陵抑制政策。王勃は一方で「皇風清」「今日太平」と唐王朝の偉業を讃えつつも、金陵が「雄都」から「小邑」に転落してしまったこと、いかにも遺憾であるといった口ぶりである。しかし唐王朝を讃えておかなければ、悪くすれば現王朝を否定する発言と捉えられる危険性がある。この危うさが唐初において金陵が詩文に描かれることが少なかった要因の一つとして挙げられるのであるが、その意味でも王勃のこの作品の存在は貴重であるし、また王勃自身の計算された唐王朝への配慮も、金陵文学史を考える上で非常に重要であると考えられるのである。金陵を鄙びた一都市として描く用例も多数存在するが、李白詩「金陵歌送別范宣」に「此地傷心不能道、目下離離長春草。」、劉禹錫詩「烏衣巷」に「朱雀橋辺野草花、烏衣巷口夕陽斜。旧時王謝堂前燕、飛入尋常百姓家。」などとあるのがその好例であろう。

⑨に当たるのが「想衣冠於旧国、便値三秋。」の部分。六朝時代といえば華やかな貴族文化に想いが及ぶのも当然であろう。王勃はそれを「衣冠」の語に集約させた。これを踏襲したのが李白「登金陵鳳凰台」詩の「晋代衣冠成古丘」の句であろう。その他、この「衣冠」という語は唐彦謙詩「金陵懐古」に「宮殿六朝遺古跡、衣冠千古漫荒丘。」、孫元晏詩「淮水」に「文物衣冠尽入秦、六朝繁盛忽埃塵。」というように、六朝を語る際の詩語として受け継がれていく。ちなみに六朝貴人達の凋落については、やはり前掲の劉禹錫「烏衣巷」が最も感慨深い作品と言えるであろう。

⑩は「憶風景於新亭、俄傷万古。」部分。『世説新語』由来の金陵

関係故事としては、前掲の明帝の故事とともに、最も採用される頻度が高い。『世説新語』「言語篇」に「過江諸人、毎至美日、輒相邀新亭、藉卉飲宴。周侯（周顗のこと）中坐而歎曰、『風景不殊、正自有山河之異。』皆相視流涙。唯王丞相（王導のこと）愀然変色曰、『当共戮力王室、克復神州、何至作楚囚相対。』」[5]とある。東晋の人士達が金陵の東南郊外にある新亭（正確な所在地は不明）[6]で宴会を開いた際、周顗が北方の中原地区（とりわけ首都であった洛陽を想定していると考えられる）の陥落を嘆いて涙したのに対し、王導が皆で力を合わせて失地を回復しようではないかと激励した話である。この故事は李白詩「金陵新亭」に「金陵風景好、豪士集新亭。挙目山河異、偏傷周顗情。四坐楚囚悲、不憂社稷傾。王公何慷慨、千載仰雄名。」、「金陵三首、其三」に「苑方秦地少、山似洛陽多。」、許渾「金陵懐古」詩に「英雄一去豪華尽、唯有青山似洛中。」とあるなど、王勃以降にもしばしば採り上げられている。

⑪は本文「九江為別、帝里隔於雲端」に当たる。ここでの「九江」は河川の多い金陵一帯の地、「帝里」とは帝都長安（ないしは事実上、則天武后の執政時代であるから洛陽も含めてもよいかも知れない）を指す。長安と金陵との遠い隔たりを嘆くものとしては、やはり李白の「登金陵鳳凰台」詩の「総為浮雲能蔽日、長安不見使人愁。」が名高い。

以上、王勃のこの「江寧呉少府宅餞宴序」が、いかに多岐にわたって金陵の都市としての「肖像」を描き出しているかということ、さらにその王勃が抽出し典型化した金陵のイメージが、いかに以後の金陵関係詩文のそれと重複しているかということについて検討してみた。この作品は、その直後に書かれた彼の代表作「秋日登洪府滕王閣餞別序」（いわゆる「滕王閣の序」）に構成法や語彙・表現などが類似しており、その習作として位置づけることも可能である。しかし唐代金陵詩文の歴史という観点からこの作品を位置づけた場合、その功績は極めて多大であると言わなければならないであろう。

五、小結〜領土の拡大化と土地イメージの典型化

唐王朝の成立は、三百年にわたる中国分裂時代の終焉を意味していた。これは唐代の詩人達の行動半径をも飛躍的に拡大したと言える。わずか二十七年の生涯であった王勃にしても、竜門、洛陽、長安、及び呉越や蜀の各地、果ては現在のベトナムの地にまでその足跡が及んでいる。またかりに自分が訪れないにせよ、その親族や友人達も同様に広大な中国各地（場合によっては西域や異国の地にまで）を旅するわけである。従って自らが旅立つにせよ、他者が旅立つにせよ、詩文の制作者はそれらの土地に対する膨大な知識を有していなければならなくなった。しかも常に文学的な発想で描かなければならないわけであるから、その負担は並大抵のものではなかったであろう。ここに土地イメージの限定化、典型化が必要になって

くる。書き手も読み手も共有できる共通の土地イメージの確立である。唐詩人達の長年の努力によって、多くの土地が典型化・イメージ化されてきたことは、その成果が今日もなお中国各地で観光地のキャッチフレーズ等に活かされていることからも容易に想像ができる。

この金陵もまた唐代の詩文によって様々なイメージが付加され、そして典型化されてきた。その先蹤を成したのが、宮体詩中心の初唐詩に新風を吹き込み、盛唐詩誕生への道筋を明確に示した、王勃という早熟の天才詩人であったことは、金陵にとっても幸福な出来事であったと言えるのではないだろうか。

注

(1)「江寧呉少府宅餞宴序」は、文中に「五嶺方踰、交州在於天際」とあることから、王勃が父の在所、交州交趾県（ベトナム北部）に赴く途次、すなわち上元二（六七五）年秋、二六歳の作であると確定できる。「白下駅餞唐少府」「秋日登冶城北楼望白下序」には製作年代を確定しうる記述はなく、特に「秋日登冶城北楼望白下序」は冒頭に諸国を漫遊する歓びとも解せる記述が見られ、一方、自分のせいで遠く左遷された父の在所を訪れるといった悲壮感が全く感じられないことから、十代の早期の作品ではないかという説がある。たとえば張志烈『初唐四傑年譜』（巴蜀書社、一九九三年）は、「綿州北亭羣公宴序」に「昔往東呉、已有梁鴻之志。今来西蜀、非無張載之懐。」などとあることから、すでに入蜀以前に「東呉」地方に遊んだことがあるとして、その年を高宗乾封二（六六七）年秋、王勃一八歳と比定し、さらに「秋日登冶城北楼望白下序」もこの年の作とする（p106）。また、陶敏・傅璇琮著『唐五代文学編年史・初盛唐巻』（遼海出版社、一九九八年）は、「東呉」漫遊の時期を高宗麟徳二（六六五）年秋、王勃一六歳の時とし、「白下駅餞唐少府」「秋日登冶城北楼望白下序」いずれもこの年の作としている（p185）。以上のように製作年代については諸説多少の相違があるものの、三作品いずれも、六六五年頃から六七五年の約十年間に絞れるという点では非常に貴重である。

(2)李白の金陵関係詩文については、拙論「金陵詩史における李白の意義（一）～李白詩に見える金陵の地名」（『中国詩文論叢』第二六集、二〇〇七年）を参照。李白の場合、詩のみに限定しても詩題・詩中・詩序に金陵の地名が含まれる作品は五十八首に及ぶ。唐代最も多く金陵をうたった詩人と言える。

(3)「明帝紀」では以下の通り。「明皇帝諱紹、字道畿、元皇帝長子也。幼而聡哲、為元帝所寵異。年数歳、嘗坐置膝前。属長安使来、因問帝曰、『汝謂日与長安孰遠。』対曰、『長安近。不聞人従日辺来、居然可知也。』元帝異之。明日、宴群僚、又問之。対曰、『日近。』元帝失色、曰、「何乃異間者之言乎。」対曰、「挙目則見日、不見長安。』由是益奇之。」

(4)この二句に対しては、「積極向上的精神」を持つという評（黄炳輝『唐詩人才漫話』「去去如何道、長安在日辺～漫談王勃的窠賦才華」（海峡文芸出版社、一九八六年）や、「詩句活用此典、意為長安如日、雖然遥遠、但挙頭可見。這是勧慰朋友的話。詩人用含蓄的語言、表達了対友人未来的無限期待、同時也流露出自己被貶離長安的失落感和悵惘之情。」（季伏昆主編『金陵詩文鑑賞』（南京出版社、一九九八年）「白下駅餞唐少府」（杜黎均執筆担当）という評がある。

(5)『晋書』「王導伝」では次のようにある。「過江人士、毎至暇日、相要出新亭飲宴。周顗中坐而歎曰、『風景不殊、挙目有江河之異。』皆相視流涕。惟導愀然変色曰、『当共力王室、克復神州、何至作楚囚相対泣邪。』衆収涙而謝之。」

(6)新亭の所在地の考証については盧海鳴『六朝都城』第四章「七、新亭壘」を参照のこと。長江に面する高台にあったと考えられる。『太平御覧』巻一七九「観」に「『輿地志』、丹陽郡秣陵県新亭隴有遠望楼。又名労労楼。末（「宋」の誤り?）改為臨滄観。行人分別之所。」とあり、また『太平寰宇記』巻九〇「上元県」には「臨滄観、在労山山上。有亭七間。名曰新亭。呉所築。宋改為新亭中間、名臨滄観。晋周顗与王導等当春日登之会宴。顗曰、風景不殊、挙目有河山之異。即謂之労労城。古送別所。」とある。